第三回「核なき未来」オピニオン

マクロン大統領、

世界は今、「平和」でしょうか。かつて「平和」であったことはあるのでしょうか。

「なんの争いにも巻き込まれていないから自分個人としては平和な時代だ」と捉える人も少なくないこの時代ですが、現在世界では数多くの争いが繰り広げられています。メディアで大々的に報道されているのはロシア対ウクライナの戦争とイスラエル対ガザの戦争ですが、実際にはシリア、アフガニスタン、ミャンマー、スーダン、イエメン、ブルキナファソ、ナイジェリアなど、その他多くの国で争いが起こっています。そしてその多くの紛争に、先進国が直接的に武器を提供したり、又は間接的に圧力をかけるなどという形で関与しています。かつてのイラク戦争は、イラクが核兵器の開発を進めているという理由でアメリカが国際連合の反対を押し切ってイラクを攻撃したことで勃発しましたが、後に開発などなかったことが発覚した時にはもう取り返しのつかないところにまで争いが進展していました。

このように、核兵器を持つリーダーたちは核兵器を持ちながら、他の国々がこの兵器を手にすることを危惧しています。何故なら核兵器は今や戦争における重要な鍵となっているからです。核兵器を持つ国々は大きな権力と影響力を保持することができます。そして、圧倒的な軍事力を持つことで、世界における外交においても有数のリーダー国になりうるのです。

フランスも例外ではありません。2024年現在EUで唯一の核兵器保有国であるフランスは、自国の防衛戦略に核兵器を本格的に組み込んでいます。それは核兵器がその破壊力から他国からの侵略を防ぐことができるためです。核抑止力はこうして実際にフランスの平和に繋がっているのかもしれませんが、しかしそれは他者の平和を脅かして自分の平和を確立させようとしているのに相違ありません。「やったらやり返す」と、拳銃を突きつけ脅しているようなものです。

核兵器は自己防衛を言い訳にした暴力なのです。

核兵器は世界の勢力のバランスを保つのに大きな役割を果たしているかもしれませんが、しかし、核兵器は現在だけでなく過去も未来も破壊してしまう恐ろしい兵器です。それは日本が一番身に染みて言えることなのではないのでしょうか。日本は長い年月をかけて、物質的、経済的、そして精神的な修繕に励んできました。平和を取り戻そうと、悲しみと苦しみに蓋をし、ただただ必死に歩んできました。今ある日本は先代の忍耐あってこそなのだと思います。暴力はもとい、核兵器を使つての暴力は決してあってはなりません。そしてこれからもあってはなりません。日本が何世代にも渡って苦しんだ歴史を繰り返してはならないのです。

また、よくインターネットの書き込みなどで、「日本人が核兵器の攻撃を受けたのは、かつて満州を侵略したのだからいい気味だ」と言う心無い外国の方をよく見かけますが、核兵器は懲罰として使ってもよい武器ではないのです。

最後に、人間には潜在的に争いごとを起こす本能があり、核兵器はそれを掻き立てる非常に危険な武器だということを認識する必要があります。例えば今や核兵器を保持するイスラエル。度々イスラエルの閣僚がイラン、イラク、ガザ地区などに核爆弾を投下する選択肢があると述べていることを耳にします。核兵器はイスラエルにとって他国との争いに負けないための保障なのです。平和を求めるために核兵器を保持するのはまだしも、争おうとする気持ちを持ちながら核兵器を保持するのは人類にとってとてつもなく危険です。

暴力からは虚無と憎しみ以外何も生まれません。防衛のため、懲罰のために用いても平和は掴めない。では一体何で平和を獲得できるのでしょうか。外交と交渉という手段がまだあるのではないのでしょうか。形だけの外交ではなく、心から平和を望んでの外交で。揺るぎない先進国である「人権の国」のフランスだからこそできることを今一度よく考えて頂きたいのです。フランスだからこそ国際的な場で核実験モラトリアムの継続を促せられるのです。2024年7月31日、平和を追い求めたフランスの政治家ジャン・ジョレスの暗殺から110年が経ちました。戦争と核兵器について今一度考え直すのに適した日ではないでしょうか。

もし人間の本能上戦争が自然体なのであれば、平和は築き上げていくものなのかもしれません。私たちには各国の衝突を防ぐことはできないため、争いと共存することを覚悟せねばなりません。19世紀のイギリスの哲学者ジョン・スチュアート・ミルが唱えた「真の自由とは他人の幸福を妨げずに自身の幸福を追求することのできる自由だ」という言葉を胸に、平和を目指すことができれば良いかと、フランスに生まれ育った日本人、そして一人の人間として訴えます。

平和とは人間全員が持つ権利なのです。

ザイアンヌ杏奈